

やまとの名品 天理図書館



くろさかのみことふん ぼ こう
黒坂命墳墓考

色川三中自筆
 江戸時代後期写 4冊
 縦28.5cm 横19.5cm

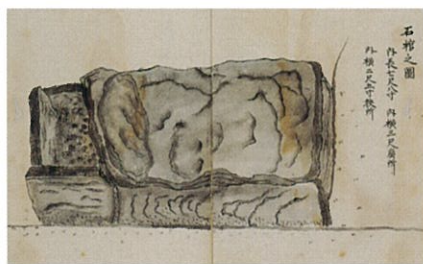
霞ヶ浦水運の発達により江戸との結びつきが強まったこともあつて、土浦で薬種商や醤油醸造を営む色川家は豪商となります。色川三中（一八〇一〜五五）が出生する頃、家は傾いてしましますが、彼が家督を継ぐと徐々に家業を再興させました。経営を軌道にのせた三中は、本格的に研究に熱意を傾け、天保七年（一八三六）には国学者である橘守部に師事。さらに、大國隆正や平田篤胤ら、多くの人々と親交を結びます。

嘉永元年（一八四八）、友人からの誘いで発掘された古墳を見学に行きます。帰宅後、すぐに執筆に取りかかった『黒坂命墳

墓考』では、墳墓の事態に即しながら文献も援用して考証を進め、『常陸国風土記』にのみ登場する武人・黒坂命の墓が、実見した弁天塚古墳（現在の茨城県美浦村）であろうと結論づけました。

本館の『黒坂命墳墓考』は四冊あり、第一種本には考察の材料が集められ、第三種本は下書き、第二種本が清書本で、第四種本は着色の付図集です。

当時、古物を愛する人のほとんどが、出土品にのみ関心をよせるのとは対照的に、彼の筆録



第4種本

は、墳墓全体を計測し、発掘されたもの全てを図示します。この徹底ぶりのため、本書を江戸時代における古墳発掘報告の秀作と評す研究者もいるほどです。

三中は病没するまで研究を続け、その範囲は国学や家業の業学にとどまらず、法制度などにまで及びます。多くの論考を残しますが、それらは生前ほとんど公刊されなかつたため、残念ながら業績はあまり広く知られていません。

（天理図書館 三村 勤）